様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基礎研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２００９２
研究課題名（和文）　沖縄古典文様に見る自然観の図像化における時空間比較

研究課題名（英文）　Time-Space Comparison in the Visualization of a View of Nature in the Okinawan Traditional Patterns

研究代表者
小倉　美左（OGURA MISA）
沖縄県立大学・美術工芸学部・教授

研究成果の概要：沖縄の古典紅型の調査、本土の古典文様の調査及び周辺諸国の古典文様の調査から、伝統文様の成り立ちはその国々の精神的背景と文様が装飾される土台の用途と表現する技法など多くの制約を受けて、文様の基となるモチーフの個性と形態が再構築され、新たな生命を持つものにと変貌し、長い時代的な背景に進化し続けている事が明らかになった。そして文様と空間は綿密な関係をもちながえら､絶妙なリズムをかもして装飾される土台を生かし、さらには装飾する事自体の必然性を語りかけており、文様は文字と同じに意思伝達の要素を持ちながら、発達して来ている事などが明らかにされた。さらに、調査研究に基づく制作として古典文様をモチーフとした作品を新匠工芸会と Japan Textile Council (JTC)において発表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,100,000	0	1,100,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学美術史
キーワード：芸術諸学

１．研究開始当初の背景

現在、沖縄の紅型を始め伝統工芸に施された文様は、古典の柄をあちらこちらから寄せ集め組み直して使っています。大学において学生たちがオリジナルな文様で紅型技法を用いて制作をした作品を紅型と認められない沖縄の社会があり、安易に古典紅型の文様を真似、似させすれば紅型と呼ぶような風潮があり、それは芸術大学で美術工芸を指導する立場として到底納得の行かない事であります。そして現在花鳥を写生し観察しその特徴をつかみ自らの制作意図をこめて文様化し紅型の技法を用いて作品として表現していく事に一生懸命励んでいる作家の一人として、きっと古典文様が制作された当初、その作者はその文様に込めた想いがあったのではないか。その想い、心を無視して表面上の形だけを安易に写し取る事に強い罪悪感から、少しでも当時の作者の心をひもとけたら、そして今安易に真似をする人に、この模

様の背景及び、作者の意図を少しでも、解明し伝えられたらと考え、古典文様の成り立ちや変化を解明していく事が重要でないかと考えました。

また、文様の制作に重要な要因を時代的及び地域的背景を比較検証する事により、現在の沖縄工芸の意匠特に文様制作に対する今までの一般的な捉え方を新たな創作を試みる制作者の立場から覚醒しなくては新しい伝統文様の誕生が不可能となると考え、古典文様における文様が制作された時代の自然観及び要因を検証し、さらに模様の形のみを写し他の模様と安易に組み合わせる事により本来のモティーフの形態から離れ、元模様の形が大きく狂ってしまう物となっている。また模様を勝手に組み直す事により本来の模様同士の関わりとそこに存在していた空間構成も破壊されている。戦火を逃れて現存できた古典紅型の文様を写し移して再現された、今の紅型文様は本来のそれとは大きな相違点がある。戦後の混乱期に紅型の再建に懸けられた熱意と労力を考えればなおさらの事、古典紅型の文様を最盛期であった琉球王朝時代の時代性、地域性、精神性の背景を踏まえていく必要を感じた事が、この研究を始める背景となっている。

今の沖縄で伝統を守り継承していくには過去をしっかりと把握していく事が必要であると考えます。

２．研究の目的

古典文様に表現された多様な自然物のモティーフの捉え方と構図の関係について、日本及び中国の主要な時代の文様との比較により、その図像化の特質を明らかにし、あわせて自然観の今日的意義について考察を試みる。古典文様がその価値を保ちながら伝統文様として将来に正しく伝承されていく事、古典文様の正しい認識は制作された多様な背景及び要因を考察する事により、現代若い作家やそれを志す学生達に彼ら独自の創作文様が未来の古典文様に成りうる環境作りが可能となると考え、その環境作りの一端となる事を目的の一つとしている。

それは、また古典伝統文様の図像化の特質を明らかにする事により、現在の沖縄の伝統工芸の制作現場で行われている、古典文様の輪郭だけを安易に写し、空間を無視した模様の組み替えなどを回避する事も意図している。多くの資料を収集する事により、古典文様の制作された時代、地域、精神的背景の調査を行う事により現在沖縄の工芸文様の制作での意識を変え新たな文様を創作し後世へと繋いでいく事の大切さを認識する。古典文様が現在まで伝承されてきたモティーフの抽象化とモティーフ相互の空間処理等の特徴を調査する事で、今の時代性、地域性、精神性、紅型の技術的要因を考慮し新たな伝統文様の創作の貴重な資料とする。

３．研究の方法

（１）１８年度

琉球王朝時代の古典紅型の文様を中心に、各種儀式や神事に用いられた衣装及び用具等をふくめて、文様のモティーフの捉え方とその構図の有り様を多くの資料を収集し、沖縄古典文様制作に関連する時代における本土の工芸美術作品について関連資料の収集を行った。本土の美術工芸に大きな影響を与えた周辺諸国を韓国にしぼり関連資料について調査資料収集を行った。

（２）１９年度

文様の制作に精神性の高さが要求される事に着目し、古来の文様制作の精神的背景を調査し関連資料を収集した。

（３）２０年度

文様の制作における技法との関連について、古典紅型の技法面での影響を及ぼしたとされる本土の友禅の調査に加え、琉球王朝時代の交易文化の中で沖縄と深く関わった南方諸国の文化技術の影響を調査し考察した。

文様化、抽象化される手順を実際に古典文様に残されたモティーフを使って文様化を試みる方法で追求した。

４．研究成果

仏教、儒教の神仙思想、自然観という精神的意味合いを具現する手段としての文様が多くの建築内装に残されており、それらの様式が交易によって大きな影響を沖縄に及ぼした。中でも１８世紀の琉球王朝時代に頻繁におこなわれた中国への留学、また工芸の技術導入の為に中国から招集した多くの指導者は沖縄の古典文様の形成に大きく影響したと確認でき、当時の琉球の政治的立場から、中国、日本の両国への配慮がうかがえ、中国的と日本的の二つ様式が古典紅型の文様の中にみられた。（参考資料１、２）

また、少数であるが南方の染織更紗にみられる文様も確認できた。（参考資料３）

これは染織の技術的素材が南方アジアから輸入されたことを意味しているかと思われる。２０年度に文様制作の一つの必然的要因として染織工芸技術の制約も視野にいれての調査をおこなったが、交易時代に関連した諸外国の中でタイ王国経て多くの紅型の用具染料等が琉球にと運ばれたと考えられる。文様と直接には関係しないが、紅型の型彫りに使われるルクジュウ、このルクジュウは豆腐を保存のために乾燥させた物で、長い航海の食料として使われたのではないかと思われる。現在沖縄ではこれを保存食料とは使用しないが、九州のある地方では漁の航海に携

帯し薄く削って湯をかけて食す様である事から、ルクジュウも交易時代の物ではないかと推測する。その様に多くの部品が行き交う交易の中に諸外国から輸入され、必ずしも、はじめは紅型染織用としてではなかったと思われるが、様々な用具がその使用方法とともに輸入されていた。

沖縄の古典文様の中で日本的な文様については、日本に対する政治的な配慮によるものだけではなく、紅型の技法が本土の友禅染めの技法を取り入れている点も注目される。

文様の中には型染の制約とモティーフ相互の空間処理の中から必然的に形成された文様が多い事に注目される。波、水、霞、雲稲妻などの自然現象をモティーフにした文様の多くが作者の感性で自由にその形を抽象化出来る事もあり、技法との関係からで有効な形となって文様が制作されたと考えられる。（参考資料４　この型紙の文様の中で雲は遠景、はるか彼方の時空を表現する為に用いられているだけでなく、型紙の強度の為と、染色工程の効率をも考えて雲の模様をとりいれ、さらに画面の中でモティーフ相互間の空間構成にも大きな効果をあげている。）

また、自然現象との組み合わせによる文様の多くは、中国の神仙思想を始めとするそれぞれの時代、地域における精神的思想が託された表現を有していると考えられ、後世の人々が安易に真似て自らの作品の中に取り入れる事は慎むべき事である。

モティーフの形が文様化されて現物とは大きくかけ離れた形をなしている文様も多い。その模様は一種の記号のようにさえ見えるが、そこまで抽象化しなくてはならない作者の意図を知るために、どのような手順で抽象化に至ったかを詳しく追求していく必要がある。

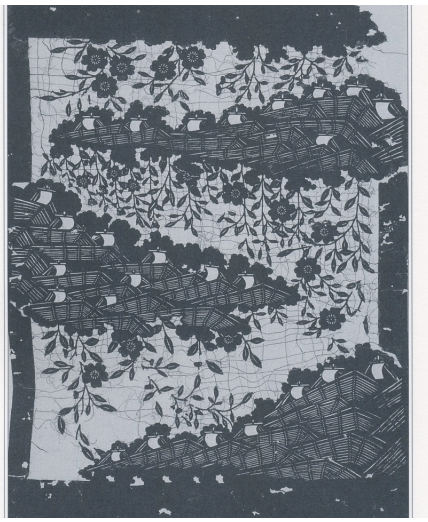
一つの例として、紅型のモティーフとしては余り多く見かけないが、「萩」の文様を見てみると、萩がどのように抽象化されたのかを実際にモティーフの写生から始め文様化を試みてみると、はじめに疑問であった「実物とかけ離れた形」の根拠を見つける事が出来る。紅型の文様の原画（型紙になる前に絵師が描いたであろう（図−１）と（参考資料２）の萩の模様にある花の形を（図−２）は実物と離れた形である。また花の形がよく似ている藤の花も（参考資料５）同じように文様化がなされている。萩の写生（図−３）からその花の特徴を掴みながら単純化させてみると（図−４）の様な形に整理されるが、（図−２）の様には成り難い。花のついている様を下からの視線で見ていくと花の茎が花の先端から出ているように見えてくる事がわかる。（図−２）の様な抽象化を納得する事ができる。藤の花も同じ事が言えるものと思われる。

現在沖縄県立芸大で収蔵している鎌倉芳太郎の型紙資料の中に大変興味深い型紙があった。それは型彫りを途中でやめた、未完成の型紙である。まだ彫られていない模様は墨の線がいきいきと残されとおり、彫られている模様の線は墨の線をさらに生かすように修正しながら彫られている、が、ただ一カ所彫りを失敗したような跡を感じる箇所があった。模様の線を生かすべくさらに刀で描く如くに彫りあげる技により、モティーフが新たな生命を宿し文様にと生まれ変わる。文様化には多くの大切な要因が込められている事を語りかけている未完の型紙であった。（参考資料６）

参考資料１（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料２（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料３（鎌倉資料　沖芸大所蔵）



参考資料４－１（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料４－２（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料４－３（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料５（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

参考資料６（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

図１（鎌倉資料　沖芸大所蔵）

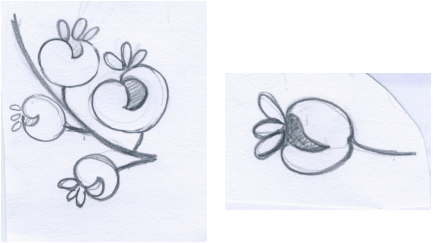


図２

図３

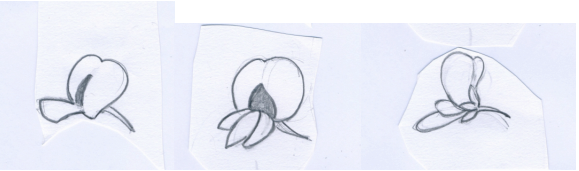


図４

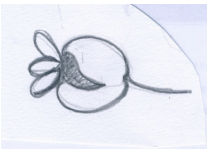
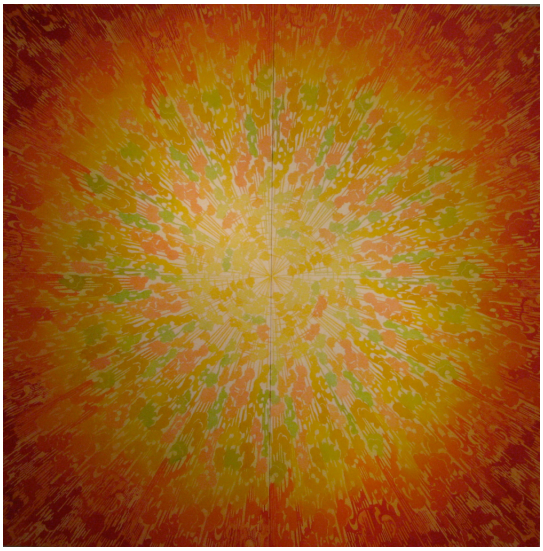


図５

作品　古典琉球舞踊衣裳
「萩に雲文　すすきに流水文」2008 年

部分



作品　「光雲」2007 年

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）
小倉美左　「雲の月」新匠工芸會図録　p70, 2007 年
小倉美左　「光明の中に」新匠工芸會図録 p47, 2008 年
小倉美左　「雲雲模糊」新匠工芸會図録　p47, 2009 年
小倉美左　「創作ノート　雲と文様についての一考察」沖縄県立芸術大学大紀要 2009 年

〔学会発表〕（計　２　件）
小倉美左　染作品　「光雲」 Japan Textile Council(JTC) 2007 年
小倉美左　染作品　「ひかり満ちて」Japan Textile Council(JTC) 2008 年

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）
○取得状況（計　０件）

〔その他〕
作品　古典琉球舞踊衣裳　「萩に雲文　すすきに流水文」2008 年
作品　パネル「風を受け 光を受けて」2008 年

６．研究組織
(1)研究代表者
小倉　美左（OGURA MISA）
沖縄県立芸大・美術工芸学部・教授
研究者番号：９０１８５５７０

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し